わたしは死んだことがないので「死」がどういうことかは何一つ語ることは出来ません。しかし、生者必滅、会者定離の理りは、私たちには一〇〇％の確実性をもっていづれの日にか来ることが定まっています。

このまぎれもない死の事実に、わたしたちは日頃ほとんど考えようとせず、目先の生活に思いのすべてを向けて日々を送っています。

〝メメント　モリ〟（汝死すべきものなり）とは中世の修道院の挨拶の言葉の一つだと聞きますが、私たちは、生きているうちに、自分の死のために備えが必要であります。

「広い野原を、ひとり歩いて行きよった。そりゃー淋しかったど」と先述のおじいさんの言葉は人間の死というものの孤独さ淋しさをよく伝え教えてくれます。

この世のお金も名誉も権力も死の世界には何ら関係はありません。

わたしたちの死の世界まで、とどく唯一つのもの、それこそイエスの言葉であり、イエスその方の愛です。

イエスは「あなたを孤児としない」と申されます。

また「わたしのいるところにあなたをおらせる」と言われる。「見よ！わたしは世の終りまでいつもあなたがたと共にいる」（マタイ28・20）と約束して下さる。

このキリストの愛の中に生き死んでゆく者には「ずーと広い野原をひとりゆきよった、そりゃー淋しかったど」という孤独はないのです。イエスが共におられるからです。

（51・11・7）

49

「互に罪を告白し合いまた　いやされるようにお互のために祈りなさい」

（ヤコブの手紙5章16節）

「自分だけ」ではなく、「共に」ということが「愛」ということです。

イエスさまは、どのような人とでも共に歩んで下さり、どのような時に於ても共にいて

下さる。ここにイエスさまの、私たちに対する愛があり、まことがあります。

また、そのようなイエスさまに感謝し、こちらからも共にあるよろこびをかみしめ、すすんで共であっていただこう、と願う心が私たちの信仰というものです。

さらに、友人や知人隣人と共に歩もうと思いやる心はイエスの愛の心にかなっており、信仰の心でもあります。

自分の幸いだけ願う心は、他人を不幸にするだけでなく、自分自身をも幸いにすることは出来ません。

「互に罪を告白し合う」ということは、ローマ・カソリックの悔悛の秘跡が定めるような形式的・神秘的なことではなく、もっと素朴で自然なものです。即ち、私たちが、自分だけのことを祈るのでなく、知人と共に感謝の祈りをささげ、互いの人生の重荷について祈り合うと時、必ず、互に自ずと、自分の罪を告白する祈りに移って行くものです。

そこでは、ことさら互いにということが意識されなくても、自然に友のための祈りが生れ、又友は自分のために祈ってくれるようになるものです。

友のために、ひそかに祈ることができる互いの交わり、これこそキリスト者の交わりが、この世俗の交わりに対してもっている異った愛の交わりです。

自分の為のみの祈りをもち、他者について「ぐち」や「不満」をいだいているのではなく、互に祈り合い、罪を告白し合える交わりをもちたいものです。

（51・11・14）

50

「兄弟たちよ。いつも喜びなさい。互に励まし合いなさい。思いを一つにしなさい。平和にすごしなさい。そうすれば、愛と平和の神があなたがたと共にいて下さるであろう。」

（コリント第二13章11節）

毎度申し上げますように、私たちは「私」だけでなく「他の人」との関わりなくしては一日たりとも、生きてゆくことはできません。

それ故に、「わたしの生活」とは「他の人とわたしとの交わりの生活」にほかなりません。

わたしと他の人との交わりが良好である、ということは、わたしの生活は良好で、幸いな日々である、ということです。

このように他の人とわたしが幸いで良好な生活をするためには、日常に於ける、ものの考え方、受けとり方、接し方がどんなであるかによって決まるのです。

〃「ハイ」という素直な心。「スミマセン」という反省の心。「オカゲサマ」という謙虚な心。「ワタシガ」という奉仕の心。「アリガトウ」という感謝の心。〃

ことごとに愚痴や文句ばかり言っている生活からは喜こびは生れては来ません。また他人を批判ばかりしている生活からは、助け合い、励まし合いも生れては来ません。「思いを一つにする」とは、目のつけどころ、気のつけどころが一つである、ということです。

つまり、自分勝手な思いやことをしていては、思いは一つになりません。

自分の意見をハッキリ言い、自分の権利を主張する、ということは決して、素直で、反省し、謙虚で奉仕の心、感謝の気持をもたないということではないのです。否かえって、自分の意見や自分の権利を主張する者こそ、その心や気持を正しく持っている者でなければなりません。

（51・11・21）

51

「憎しみは、争いを起し、愛はすべての罪をおおう。」

（箴言10章12節）

「何よりもまず　互の愛を熱く保ち

なさい。愛は多くの罪をおおうものである。」

（ペテロ第一4章8節）

フランスのことわざに、「すべてを知る者は、すべてをゆるす」というのがあるそうです。

たしかに、ことの善悪というものは、時として、自分を中心にして決めてしまいがちです。〝私に不幸や不利益をもたらしたからあの人は悪いだ〟〝私の思うようにしてくれないから、あの人は悪い人だ〟などと思いがちです。

また、〝あのような悪いことをした〟〝このような悪を犯した〟などとその人を悪人としてせめてばかりいることがあります。

しかし、立場を逆にして、自分が同じ立場に立たされた時、その人と同じようなことを為さねばならないどうしようもない理由があったことを発見するかもしれない。そのとき

〝ああ、あの人があのようなことを犯したのも無理からぬことだったのだなあ〟と思うようになり、犯したこと事体は悪でも、その人をゆるす心が生れてくるものです。これ即ち、「すべてを知る者は、すべてをゆるす」ということであり「愛は多くの罪をおおう」ということであります。

しかし、「あなたの気持がわかる、わかる」ということで、ことを終ってしまうのでは末だ愛ではありません。「はたして、あなたは　そうするほかに　しかたがなかったのだろうか!!」と相手と共に反省し、考えてみる、そこまで至ることが愛ということ、思いやりということです。そして、それが対話ということなのです。

このような対話を失った交わりは、誤解を生み、思いちがいを生じ、憎しみ争いを生むことだってあります。

私たちは日々失敗し、罪を犯します。しかし、神はこの私しの心を知り給い、ゆるして下さっています。

故に私たちも、相互に、愛と思いやりの心で相手を見、対話して行きたいものです。

（51・11・28）

52

「〝わたしと一諸に食事をしている
者が、わたしを裏切ろうとしている〟
弟子たちは心配して、ひとりびとり
〝まさか、わたしではないでしょう〟
と言いだした。」
（マルコ14章18節19節）

誰れもイエスを裏切らないで生きることはできません。イエスを裏切るとは自分の利益のために他者を捨てる不真実・非愛の心と行為のすべてを指しています。

イエスを裏切らずして生きることができると自分から思い信ずることは、自分に対して、

また、人生に対して、さらに、人間について重大な思いちがいをしているところから生じるのです。

裏切りという行為は、人が置かれた状況によって生じるという唯物的な考えをはるかに越えた、きわめて人間存在の根本にかかわる業、又は罪性によるものです。ここで理屈は述べますまい。それより、自分の日々の生きざまを深く省りみるならば、ことがらはハッキリします。

イエスの言葉に対して、「まさか、わたしではないでしょうね」という弟子たちの反応は人の心の深くを言いあてています。

だれもが、自信があるようで、その実ないのです。人は決して強くはありません、弱いのです。

この人の弱さを知り、悲しみ、はじる心をもつ、それは正しいことです、素直です、まことです。

それに引きかえ、人のこの弱さを知らず、人間の弱さの悲しさを覚えぬ者は、自分につ

いて、人生について、人間について、重大な思いちがいをしている人です。

イエスは裏切りのユダを怒っておられるのではありません。ユダの人生・存在そのものに限りなくいとをしさを覚えておられるのです。そして、ユダは特別な人間ではありません。わたしたちのだれもが背負っている人間の悲しさにたをれたのです。わたしたちは、この悲しさ弱さの故にのみ、イエスさまが必要なのです。

（51・12・5）

53

「あなたがたは　それぞれ賜物をいただいているのだから　神のさまざまな恵の良き管理人としてそれをお互のために役立てるべきである」

（ペテロ第一の手紙4章10節）

「十人十色」と申します。人間一人一人がみなその姿形がちがうように、考えや好みがちがい、更に、それぞれが他の人にない「良さ」というものをもっているものです。

その他の人にない「良さ」というものは、神がその人に与えて下さった「賜物」（カリスマ）であると聖書は教えております。

しかし、その「良さ」を神の賜物として見出し、感謝して用いるという人は少ないのではないでしょうか。

ひとは、他人の欠点ばかりをよく見て、それについてあげつらいます。

また当人も自分の「良さ」を積極的に行使してゆこうとせず、他と比べ自分の非をなげいたり、他人の良さをうらんだり、ねたましく思ったりするものです。

今日の聖書の言葉を今一度見て下さい。そこには、先ず第一に、賜物をいただいていることを知りなさいとすすめております。そして第二に、その賜物は、どこまでもお恵みなのであって、決してその人自身当然であるとすることができないものであることを知りなさいと教えています。　これが本当の知恵ー恵を知るーです。

さらに第三に、その賜物をよく管理しなさいとすすめます。即ち自分の利益のみに用いるのではなく、賜物を相互に役立てるように用いなさい。とすすめています。

これが人と人との交わり（コイノニヤ）の本当の姿なのです。コイノニヤとは一つのものを共有して共同の生活をすることです。

一つのものとは、賜物は各自のものであって、実は各自のものではなく、皆のもの、神のものなのです。

又この賜物を相互のために用いることを奉仕とも申します。

賜物を相互のために役立たしめる交わりを私たちも仲間として育てたいですね。

（51・12・12）

54

「光はやみの中に輝いている」

（ヨハネ福音書1章5節）

ここで言うところの「やみ」とは、仏教で言う無明の意味に近い内容であります。即ち、人生の真理に対する正しい智慧の無きこと、また、ものごとの道理をはっきり理解しない状態、さらに、苦悩や不幸の根本原因としての迷い惑う心などです。

考えてみると私たちは一見さも賢そうな顔をして偉らそうに生きていますが、その実、明日の吾が身の生について知ることなく、頭で考え口で語る道理のたてまえと内なるほんねとはうらはら程に異り、自からはそれを知りつつも、いかんともしがたき全く愚か者でしかないのです。

この私たちの本当の姿が「やみ」なのです。

したがって、「やみ」とは、私たちが人間である故に、人間として背負わねばならぬ悲しき性そのものが相互に織りなす人生模様そのものを言っているのであります。

私たちにイエスが関わり給うのは、この私たちの「やみ」そのものに於てであります。

イエスは、「やみ」について怒っていられるのではない、また「やみ」に生きる人間に教訓を与えようとしているのでもない。イエスは「やみ」に生きる、否、生きねばならぬ人間を、限りなくいとおしんでいられるのです。

このいとおしむ思い即ち愛の姿がほかならぬイエスの生涯であります。

そして、そのイエスのいとおしむ心にふれた者は慰めを得、希望を得、生きる力が与えられたのです。

このような限りなくいとおしむ慈悲の存在者のことを「光」と言ったのです。

クリスマスとは、この私の「やみ」の中に「光」の到来を示す日のことなのです。

（51・12・19）

55

「主は恵み深かく　そのいつくしみ

は　かぎりなくそのまことは　よろず
代に及ぶ」

（詩篇　一〇〇篇）

今日は今年最後の日曜礼拝、一年の感謝をこめて礼拝しましょう。

この一年も、自分の内に於ても外に於ても、いろいろなことがあり、それらのすべてについて、どうしても感謝などできないと思う人も多いのではないでしょうか。

しかし、それにもかかわらず〝主は恵み深かく、そのいつくしみは、かぎりなく、そのまことは、よろず代に及ぶ〟のです。

わたしたちが〝主の恵みだ〟というとき、自分に直接何らかの利益を得ることがらをさして言っています。しかし、神の恵みということは、自分の利益・不利益を中心にして考えていては見えません。

「もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はその御手のわざをしめす」と詩篇の記者

は神の恵みをうたいあげています。

そして、「語らず、言わず、その声きこえざるに、そのひびきは全地にあまねく、その言葉は地のはてにまでおよぶ」（詩一九）と神の恵みをたたえています。

ここで再び思い出すことばは、南禅寺管長の柴山全慶氏の「花は黙って咲き、黙って散って行く。

そして再び枝には帰らない。

けれども、その一時一処にこの世のすべてを託している。

一輪の花の声であり、一枝の花の真である。

永遠にほろびぬ生命のよろこびが、悔いなく、そこに輝いている」

利己という我の世界をすてて静かに深く自分の周囲の世界を見る時、主の恵が充ちあふれていることに気づくのです。

この一年、この大きな主のお恵みの下で保たれ、ゆるされ、生かされてきたのです。

最後に、この一年の相互の交わりを感謝します。

よい新年でありますように。

（51・12・26）

56

「求めよ、そうすれば与えられるであろう。
捜せ、そうすれば見いだすであろう。
門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。」
（マタイ福音書7章7節）

「求めよ」、「捜せ」、「門をたたけ」と言って叱咤激励しているのではありません。神は、私たちが「求めない先から、私たちの必要なものはご存知なのであります。」（マタイ6・8）　この神の愛に気づき感謝して生きる生き方について語っているのが、

表記の聖書の言葉であります。

したがって、これは命令的な教えでなく、神の愛の確かさについての説明なのです。

ですから、つづいて次のように再び語っています。

「あなたがたのうちで、自分の子がパンを求めるのに、石を与える者があろうか。魚を求めるのに、へびを与える者があろうか。このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物をすることを知っているとすれば、天の父はなおさら、求めてくる者に良いものを下さらないことがあろうか」（マタイ7・10～11）

神のお恵みがある、それを私たちが求めることによって得るというのではありません。

神の恵は、私たちが求めぬ先から与えられているのです。

この場合、私たちが、それについて知っているか否か、ということは問題ではないのです。私たちの側に一切かかわりなく神の恵みは、私たちに与えられているのです。

この神の愛の確かさについて語っているのが、表記の聖書の言葉であり、それ故に「求めなさい」「捜しなさい」「たたきなさい」と語るのです。

この年も、この神の愛を感謝して共に信仰の道を歩んで参りたいと存じます。

（52・1・2）

57

「自分の命を救おうと思う者はそれを失い　自分の命を失う者は　それを救うであろう」

（マルコ福音書8章35節）

大徳寺の孤逢庵という寺に、日本一の国宝といわれている喜左衛門井戸と呼ばれているお茶碗があるそうです。

ところがこの茶碗もっとも平凡な器だそうです。

柳宗悦は、この器の美しさについて言うに、今日の「楽」ほどつまらん茶碗はない、な

ぜかというと、楽の茶碗はどうしたら善く見えるか、どうしたら茶に向くかと思いめぐらし、意識分別によって、わざとらしく美を作り出したものだから、その美が、どことなく賤しい。ところがこの喜左衛門井戸は、そうした人為はからいが少しもない極めて普通の雑器であり、昔朝鮮の名もない職人さんが、無心に何百と作った中に、自然に出来上った美しさであるから、この美しさは、どんな日本のえらい楽焼きの名工がつくった茶碗より、優れた美しさをもっているのだ、と。

これは、柴山全慶師が禅心禅話の中で語っていることですが、表記のイエスの言葉を理解するのに、よい参考になると思うのです。

「どうしたら、よく見えるか、どうしたら茶に向くかと思いめぐらし、意識分別によって」作り出された美は、「どことなく賤しく」本当の美しさが死に失せてしまう。それに反して、名もなき職人さんが無心に作った、即ち自分というものを考えずに作った茶碗の中に、かえって、本当の美しさが現れている。

そうです。自分の命を救おう救おうと日夜考え努力する者の信仰や生活、又立っている

境はどことなく賤しさがあり、むしろキリストのふところに自己をゆだねた者のけんきょな生き方、信仰、人生の中にこそ本当の人生の安らぎ、信仰のすばらしさ人間の喜こび希望を見ることができるのです。

（52・1・9）

57

「人の徳を高めるのに役立つような言葉を語って、聞いている者の益になるようにしなさい。」

（エペソ人への手紙4章29節）

自分の置かれている「場」又は、自分が語っている「相手」などを、よくわきまえ知って「言葉を語る」ということは、かんたんなようで仲々むつかしいことです。

パウロは「わたしはユダヤ人には、ユダヤ人のようになり。ギリシャ人には、ギリシャ人のようになった」。と言っていますが、これは、パウロが、よく相手を見ており、相手に自分の言わんとするところを正しく理解していただこうという願いが、パウロをしてそうさせたのです。

「相手を見て、ものを言い」「竟に入って禁を問い、国に入っては俗を問う」（礼記）即ち「里に入りて里に従う」だけの愛と知が成人という大人に必ずほしいものです。

言葉多きがゆえに他人に自分の思いが通じるものでもないし、だからと言って黙っていては理解されません。

結局その人のもつ生活の智慧であり、わきまえです。聖書はこの人が人としてもつべき深き生のわきまえをその人の内につくりあげ、うえつけるものだと思いますし、そのわきまえに生きる人を信仰者と呼んでいるのだと言えます。

従って、自分の置かれた「場」を知り、自分が語っている相手をわきまえて語る者は、正にその場や相手を高めゆたかにし、よろこびをまきちらす「花神」の役をなすことになり

ます。

せまい個人の利害得失の思いあさはかな心で、ひとりよがりのことを語る者は、正に「愚か者」です。

最後に一言

「人を知る者は智なり、自ら知る者は明なり、人に勝つ者は力あり、自ら勝つ者は強し」

（君子）

（52・1・16）

59

「何事も党派心や虚栄からするのでなく、へりくだった心をもって、互に人を自分よりすぐれた者としなさい。おのおの、自分のことばかりでなく他

人のことも考えなさい。」

（ピリピ書2章4節）

「胸に一物、背に荷物」という言葉があります。

人間生きてゆくのに、いろいろ背に負わねばならぬ荷物がありますが、そのうえ、さらに胸の中に一物持っていたら、いよいよ生きてゆくことは大変です。いらぬ党派心・虚栄心などという、自分の我などすてて胸の中を空っぽにすれば、さぞかしせいせいすることでしょう。

このような胸の一物を全くすててせいせいした者のことをイエスさまは「こころの貧しい人はさいわいである。天国は、その人のものである」（マタイ5・3）と申されたのであります。

「天国」とは、神の慈悲深い配慮の及ぶところ、という意味です。今ここに自分が生かされていることにも、神の慈悲深い配慮がある、ということに気ずくなら、わたしたちは、

余計な我によるはからいなどは無用のことだと思うことができましょう。

右のような我による余計な一物を己が胸のうちにもっておるから、へりくだって感謝する心も生れて来ないし、ましてや他人のことを配慮する心など生れて来ないのです。

イエスさまは申されました。〝空の鳥を見るがよい、まくことも、刈ることもせず、倉に取りいれることもしない。それだのに天の父は彼らを養っていて下さる。あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか。〟（マタイ6・26）

ここには、おろかな私たちにもよく目に見えて具体的にわかるように、神の慈悲深い配慮の現実が語られています。何とありがたいことでありましょう。

（52・1・30）

60

「何事も思い煩ってはならない。た

だ、事ごとに感謝をもって祈りと願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。そうすれば、人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安が、あなたがたの心と思いとを、キリスト・イエスにあって守るであろう。」

（ピリピ4章6節～7節）

ひとりで生れ出て来た人間は、ひとりで生き、ひとりで死んで行く。人がこの世の人間の生を分別をもって見るならば誰れしもそのように思うにちがいない。

〝けっきょく、他人などはたよりにならない。自分だけが自分にとってたよりになる〟と思い到るものです。

パウロには自分をむなしうして、ひたすら、ひとの幸いのために献身的に働いた結果、ふと次のように口からもらしました。〝人はみな、自分のことを求めるだけだ〟（ピリピ

2・21）と。

ひとが自からの心の中深くで何にがしかの思いをもてばもつほど。自からの孤独性を味い知るものです。他人と自分との間には深い越えがたいふちを見ます。

この人が生れながらに背負っている孤独、しかしこの孤独は分別による孤独であることを教え示して、孤独を消し去るものそれがキリスト・イエスの恵みであります。

鳥がなく、花が咲く、雨が降る、風が吹く、雪がふる、私が生きている、他人も生きている。そして、花が散り、雨が止み、私が死す、他人も死す、風がやむ。太陽がのぼり、そして西にしずみ、また、東に出る。

このまぎれもなき現実に眼を開かしめられるとき〝人知（分別）ではとうてい測り知ることができない神の平安が、わたしたちの心と思い〟に充ちる。

ここにこそ、ことごとに感謝をもって祈りとねがいとをささげ得る世界があることに気づく。

このような祈りをささげたいものだと念います。

（52・2・6）

61

「健康な人には医者はいらない。いるのは病人である。
わたしが来たのは、義人を招くためではなく、罪人を招いて、悔改めさせるためである」
（ルカ福音書5章31節）

昔の歌に
「人多き人のなかにも人ぞなき、人となれ人、人となせ人」というのがあるそうです。
この歌の意味は申し上げるまでもありませんが、ほぼ次のようなことだと思います。
つまり、目鼻を備えた人は多くいるが、人らしい人はいない。そこで、人々よ!!相互に人が人らしくなり、またなれるように努力し、感化し思いやってゆきなさい。ということではないかと思います。
よく考えてみますと、この思いや願いは、わたしたちのだれもが相互に対し、また自分

に対してもっているものであり、神への人間の祈りのようなものであり、さらに、神が人について願っていられることでもあるのです。

イエスは、人間らしい人間のことを「健康な人」と言われ、人間らしさを失った人のことを「病人」又は「罪人」と申されました。そして、さらにイエスは、わたしのなすべきこと、また願っていることは「病人」即ち「罪人」が「健康な人」になっていただくように助けあげることです。と申されたのです。

とすると、イエスの願いは私たちの願いであり、神ご自身の願いでもあるわけです。ここにイエスと私たち、又神と私たちの共通の交わりの場があるのです。

最後にもう一つのお話し。

その昔ギリシャの哲人の一人が、昼間太陽が照りわたるもと、ちょうちんに明りを灯け、何かを深すごとく、求むるごときかっこうで道を歩いているのをその友人が見てたずねました。

「君一体何をしているのだ」

すると哲人曰く
「おれは人間をさがしているのだ」
これ即ちイエスの心、人の願いであります。

（52・2・13）

62

「ユダヤ人はしるしを求め、ギリシャ人は知識を求める。しかしわたしたちは、十字架につけられたるキリストを伝える」
（コリント第二1章22節23節）

その昔、千眼天子という天人がいました。彼はどんな遠い所のものでも見えるし、どん

な細かいものでも手にとるように見えるのですが、妙なことに自分の着ている着物のがらが判らない。この話を聞いたある人が語る人にたずねました。

「千里先のことが皆判っておりながら、自分の着ている着物のがらが判らんということは一体どうしたことか」

語っている人、それに答えて曰くに、「彼れ無上の智慧の眼なきが故に」と。

この場合、自分の着ている着物のがらが判らぬ、ということは、自分がどういうものであるかということが判らないということです。

知識というものは遠いもの細かいものを手にとるように見せてくれる学問・技術を生みだします。しかし人間の生き方在り方の道理は示してくれません。

人間の在り方生き方を示し教えてくれるものが「智慧」です。

知識は「尋ね伺う」又は「観察」に始まりますが、智慧は「静慮」つまり心静めることに始まります。ですから知識は〝眼をしっかり開けて見よ〟というし、智慧を得るには〝眼を閉じて考えてみよ〟といいます。

又知識は段々に積んでゆくものでありますが、智慧は磨いてゆく、つまり、無くして行く、心を空しうしてゆくことによって得るものなのです。そうすることによって、人間の道理。天地の道理が、少しづつ見えてくる、この道理が見えてくることをキリストが見えてくると言ってもよいと思います。

わたしたちは知識でもって聖書を読んだり、イエスを理解しようとしては聖書もイエスも本当に自分の身につきません。

ところで聖書は「知識」をグノーシスと言い、「智慧」をソフィアと言っているように思います。

（52・2・20）

63

「なぜ、兄弟の目にあるちりを見な

がら、自分の目にある梁(はり)を認めないのか」

（マタイ福音書7章3節）

〝人情知り難きに非ず、自己の情即ち他人の情なり〟とあるごとく、自分以外の人やものをよく解るためには、先ず、自分がどういうものであるかということを知らねばなりません。

自分の気もちがよく解れば他人の気もちも解るようになりますし、自分がいかなるものであるかということに眼が開けると、やがて生きとし生けるものはどういうものかということに眼が開けることになります。そればかりでなく、人が自分の生活、人間の生活がわかれば、その人生を取りまいているところの山河日月に至るまで、それらが何の為にそこにあるか、ということまでよくわかるようになるのであります。このことがわかることを「自他不二　内外一如」を悟る、と申します。又このことがわかることを「キリスト」を

知る、と言います。

しかるに、今日の人間は、自分を先ず以って知ろうとせず、ただやたらと、自分以外のものやことがら、他人にことこまかく眼を向け、研究と称し、又批判と称し、さらには信仰と言って、さもそこから人間にとって重大なこと、大切なことが発見出来、わかるかの如くに思い込んでいます。

自分には梁(はり)のような大きい欠点がある、いろいろ他人さまに迷わくをかけることもあろうし、人として充分ではない。それにもかかわらず、今自分は生かされ生きている。この絶対的に大いなるお恵みのもとに、その欠点もつつみ込まれ、ゆるされている。その欠点にもかかわらず太陽は照り輝いてくれる、月は夜を照らしてくれている、これは何とありがたいことであろうかと思います。私たちは罪になげくのでなく、お恵のもとにあることに平安を覚ゆることこそ大切というものです。大いなるお恵みの前にはも早や、自もなく他もなく、内もなく外もなく一如なのです。キリストだけなのです。

（52・2・27）

64

「わたしが福音を宣べ伝えても、それは誇りにならない。なぜなら、わたしは、そうせずにはおれないからである。」

（コリント第一の手紙9章16節）

私の知っているあるお方は、ひとから一筆何か書いてくれと言われるときまって書かれる言葉があります。それは

「物を受くるに　心をもってし、法を受くるに　身をもってす」これです。

たしかに、この言葉はとても大切なことを語っています。

例えば、私たちが食事をする折に、お腹がすいたというので飯(めし)をかき込んだのでは、それは犬や猫と同じことになる。しかし、有難く感謝していただくなら、それは、「物をうくるに　心をもってした」ことになり、ここに人間の人間らしい食事のさまがある。これ

すなわち食前の祈りをするゆえんである。

次に「法を受くるに身をもってす」という意味について申しますならば、法とは、さしずめまこと、神の真実、神のお恵み、神の愛といったものです。そして、それを自分のものとして解るには「身をもって」せよというのです。では「身をもってする」とはどういうことかというと、理くつで知るというのでなく頭で覚えるというものでもなく自分の血とし肉と為すこと、例えで申しますと自転車に乗っている人が運転を考えてしないまでに身について自づとしている如く、また、人が歩く時に二本の足が自ずと動くほどに歩くことが身についているように、自分のものとなるということです。

パウロは、神のお恵みをまさに身をもって受けたが故に「わたしは、そうせずにはおれない」という程までに、自分にとって当然となり、血となり肉となったのです。

頭で覚えたものは忘れます。しかし、身についたものは忘れようと思っても忘れることができないのです。パウロは「私の中にキリストがおり、キリストの中に私がいる」という程に、神の愛を身に受けたのです。

（52・3・6）

66

「ペテロは人々に〝この曲った時代から救われよ〟と言ってすすめた。」
（使徒行伝2章40節）

「彼女は男の子を産むであろう。その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである」
（マタイ福音書1章21節）

一体「救われる」ということは、どういうことをいうのでしょうか。このことについて少し考えてみましょう。

救われる、というのは、わたしたちが、ある状態から、それとは異った平安な状態、安心立命ができる状態に移ることを言うのだと思います。

では、平安な状態、安心立命の状態とは、どのような状態なのでしょうか。一口で言うことは、なかなかむつかしいことでありますが、あえて申しますならば、「見通しがつく」ということ、つまり、自分の人生、人間というものはどういうものであり、どうなるのかということに見通しがつくということであります。また見通しがつくということは、もう早や迷わない、惑わないということであります。このようになることを「さとる」と言い「さめる」と言います。従って見通しのついた人は安心するのです。立命をあじわい平安を得るのです。

人は生れてやがて死ぬ、その間にいろいろなことがあり安心したり不安になったり、喜こんだり悲しんだり、愛したり憎んだりする。このような複雑で一寸先暗のような私しどもの人生に、ハッキリした見通しを教え与えて下さる。これがイエスさまであり、その見通しの内容ともいうべきもののことをキリストと聖書は言っているのであります。

それ故に「救われる」とは「キリスト」を見ること、知ることであります。（ここではキリストを真実といいかえたほうが理解しやすいと思う）　（52・3・13）

66

「神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスに於ける永遠のいのちである」

（ロマ書　6章23節）

先の週報で「救われる」ということは、自分の人生・人間というものはどういうものであり、どうなるのか、ということに見通しがつくことである、と申しました。

そこで、今回は「見通しがつく」とはどういうことなのか、ということを少し考えてみたいと思うのです。

結論から先に申しますと、人間には死がある。そして私も死ぬのだ、ということをよく知って生きてゆく、つまり死ぬということがあってもよいような生き方をする、これが人間の生き方であります。その点、動物はこのことを考えずただ生きているのです。

わたしたちがもし「私」「おれが」という「我」にしがみつき生きているなら、「私」

というものを大きくつつんでくれている神のお恵みに気づくことができません。

「私」という存在は、よくよく考えてみると、私が思っているほど確かな存在ではありません。手足をはじめ自分の体だと思っているものは、実は一時の借りもの、いただきものなのです。「私」という「我」など実は無いのです。あるように思い込んでいるだけです。あるのは神のお恵みだけ、そして、そのお恵みによっていかされているのが私の現実であります。

このことに気がついてくると「我」が少しづつ消えて、お恵みの方がだんだんはっきり見えてくる、お恵みを自分が理解し知りもっているのでなく、お恵みの中に自分がいだかれ、生かされているのだということが心で魂で感じられ、ありがとうございます、と思わず手を合す。

「あゝ私をして私たらしめているのはこれだ、このお恵みだ」ということに眼覚める。その時私は、生かされている道が、そのまま死んでゆける道であることに気づくのです。

これが〝キリストにある永遠のいのち〟という意味なのです。そして「救われる」「見

通しがつく」ということの内容なのです。

（52・3・20）

68

「神さま　罪人のわたしをおゆるしください」

（ルカ福音書18章13節）

人はすべて罪人である、と聖書は申します。

漢字で罪とは〝四つの非〟と書きます。さしずめ、その非なる四つとは、我痴・我見・我慢・我愛を指しているとすれば、なるほど人はすべて罪人だとうなずけます。

我痴とは、一体自分がどのような者であるかということを知らないでいることを言うのであります。

我見とは、わたしの考えはこうなのだ!!と自分の意見に止まり、他の人の意見にけんきょに耳を傾けようとしないことを言うのであります。

我慢とは、ごうまんな心をもって他人を見下すことであります。

我愛とは、自分に執着することであります。

人間というものは、もともと、ひとりでは生きてはゆけません、人の間に在って他の人と交わり関わってこそ生きてゆけるもののように在らしめられているのです。にもかかわらず我痴・我見・我慢・我愛をもって人が生きるなら、人と人との交わりはつぶれ、争いが生じるに至り、それは、とりもなおさず、人をして人の間に在って他の人との交わりに於てこそ人間として生かしめようとする、人の定めに反することであり（聖書が言う罪、つまり標的に当り損うということであり）その定めの愛に反逆する、という意味で人間は不幸であり、罪を犯すことになるのであり（つまり忘恩の罪である）、即ち、人の定めとは、決して、こう在るべきだという定ではありません。定めとは、人をして幸いに生かそうとする神の人への熱愛・慈悲の現れとしての道理なのです。ですから、罪を犯すとは定

を破るということではなく、神の慈悲の現れである道理としての定めに忘恩的行為を犯すということなのです。

このことがハッキリ覚るとき「この罪人なる私を、おゆるし下さい」と祈らざるを得なくなって来るのです。

（52・3・27）

68

「主よ、わたしから離れてください。
わたしは罪深い者です。」
（ルカ福音書5章8節）

先週につづいて〝罪〟について考えてみましょう。

人間と動物との違いの一つは、動物には欲がないのに人間には欲がある、ということで

す。即ち、動物はものを食べるのに満腹になれば、それっきりです。しかし人間は満腹になっても、なおそのうえに手にもっておきたいと思う、そう思う思いが欲というものなのです。

このことは食についてだけではありません。色欲について然りであり、財欲について然り、名誉欲について然り、さらに安楽欲についても同じです。

10万円ほしいと思い、その思いがかなえられると、それと同時に20万円ほしくなる。20万円もっと、こんどは30万円ほしいと思う。このように人間は一つの願いが満たされてもそれで満足し、ありがとうございます、といって終りにしない、すぐに次の願いを出す、これが欲というものです。そしてこの欲の故に人間は、いろいろな争いを起すのです。このような生き方に生きる人間の姿のことを煩悩業に生きると申します。

そして、このような生き方について、「渇して塩水を飲むがごとし」という譬(たとえ)がありますが、まことに私たち人間がもつ欲というものは咽喉が渇いたときに塩水を飲むようなものです。

ところで、聖書のいう罪とは欲をもったり、欲に生きること自体をさして罪というのでなく、その欲に生きることにより、人が人としてのまことの道をふみはずしてしまうこと、即ち神のお恵みを忘れて、自分勝手な忘恩の生活におち入ってしまう、そのことを罪というのであります。

私たちは、日頃人間であることを誇りとし、動物ををさげすんでいますが、考えてみると動物より賤しいのが私たち人間だとつくづく思います。「主よ　私から離れてください　わたしは罪深い者です」と祈らざるをえません。

（52・4・3）

69

「あなたは殺してはならない」

（出エジプト記20章13節）

これは、昔モーセという人が、シナイという聖なる山で神から与えられたという十の教えの中の一つであります。

この場合「殺してはならない」とは、直接的には「人を殺してはならない」ということだと思われますが、わたしは人だけでなく、この地上のすべて存在する動植物へのいたわりのすすめとして受けとりたいと思います。

従来、動物も植物もすべて人間のために神が与えて下さったものだから、それらをどのように人がしてもよいのだという思想が旧約聖書にあり、キリスト者もそれを当然のこととしていたように思われます。しかし、イエスさまは決して、そのようなことは福音書では語っていませんし、むしろ、空の鳥や野の花などを神の被造物としていつくしんでいられるように思うのです。

それにしても、わたしたち人間は、生きて行くためにはどうしても動植物を殺して食わねばならない。わたくしは、ここに人間の動物性を見て深い悲しみを自から覚ゆるのです。

相手が動物・植物であれ、そこに生きている者を殺して食うということはむごいことで

す、法律以前の罪を感じます。

でも、そうしないでは生きてゆけないとすれば、出来得る限り殺生をしないで生きてゆくようにしたいと思う。ここに人間としての修行があるのではないでしょうか。

西洋では牧師が銃をかついで野山に動物をハントしに行くと聞きます。また海に川に魚つりに行くことを楽しみにしている牧師がいるといいます。

動植物を殺生するな!! 食うことはならぬ!!というのではありません。殺生し食わずに生きてはゆけぬ吾が身なれば、せめて殺生を少なくし、食うことを成るべく少なくしてゆくだけの心がけをもちたい、そういう思いやりをもちたいと思うのです。

動物は只与えられた生のままに生きます。しかし人間はちがいます。ここに人間のしるしがあります。

（52・4・10）

70

「あなたは盗んではならない」
（出エジプト記20章15節）

これも先週の聖書の言葉と同じく、モーセがシナイの山で神から与えられたという十の戒の一つであります。

「あなたは盗んではならない」とは、まことに平凡な教えのように思えます。しかし平凡だと思うのは、教を受けとる私たちが平凡なので、その教えが平凡に思えるのであってよくよく考えてみると大切なことを神は言っておいでになることがわかります。

盗むとは、自分以外のものを所有主にことわりなく自分のものとすることです。されば、私たちにとって「私のもの」とはどれとどれを言うのでしょうか。よく考えてみると実は「私のもの」というものはどれ一つとしてないのです。手も足も眼も口も、その他身体のすべて、更に空気も水も、そのあらゆるものは「私のもの」ではないのです。にもかかわ

らず、それらのすべてを、あたかも己れ自身が以前から持ち、その所有主であるかの如くに思い込んで、自由自在に使用している。これらのものは、つまるところ神のものです。

私たちは神へのことわりもなく、感謝することもなく、当然のごとくに使用しています。と考えてくると、私たちは大盗人です。

「あなたは盗んではならない」とは、社会に於ける人倫の道理でありますが、只に他人のものを盗むな!!というに止まらず、人が自分に与えられているすべてのこと、ものに感謝して生きねばならぬことを言っているのではないでしょうか。

山を見、川を見、月を眺め雲を見る、これらはすべてお恵みです。感謝すべきことです。

感謝の心なく山を見、川を見、花を眺めその美しさを味うならそれは神のものを盗んだことになるのです。

（52・4・17）